

今年の干支は辰年であり、辰＝龍についての運勢が語られ、各地の寺社では大きな絵馬などが掲げられている。私は前回のテーマに「新年初詣に思う」と題してエッセイを投稿したが、干支の中に唯一架空の動物として、力強く空を飛び、水を呼ぶ存在として、運氣上昇、生命力の象徴とされてきたことを記した。しかも神話の時代から現在に至るまで、我々の日常の生活の中で息づいていることに、私の好奇心をくすぐる対象として、今回のテーマは「辰＝龍」を取り上げ、何故かという不思議を知る手がかりを拾いあげてみた。意外に龍は日本人の暮らしの中で共存していることを改めて認識させられた。

私は下町に育ち、少年時代には銭湯へ通ったが、その時男性の背中一杯に入れ墨をした人をよく見たものである。そして彩色した見事な絵柄が今も印象に残っている。鋭い目の龍の顔が、私と龍との初めての出会いであったろう。戦後、村や町に伝統の祭りが徐々に増えだし、だんじりが引き回され、その屋台の周りの柱や梁に龍の彫刻のあったのが記憶にある。だんじりの他にも、大抵の神社やお寺には龍の彫刻が見られるし、私の住む近くに由緒ある八尾神社があり、私の絵の先輩が描いた大きな龍の絵馬の事を前回のエッセイに書いた。宮司の常駐しないこの小さな神社の本殿の梁にも龍の彫刻がみられる。また境内には小さなお堂があり白龍大神が祀られている。どこの寺社に参拝しても、大抵お清めの手水舎(ちょうずしゃ)には石造



だんじりの龍の彫刻

かブロンズ製の龍が鎮座し、口から水をふきだしているのを見かけるがこれも龍が水神である事を表している。



八尾神社の龍の彫刻



手水舎の青銅製 龍像

成人になって友人と旅する事を覚え、各地を訪れた中に、神戸の南京町の中華街で、春節期間だったことから爆竹を鳴らし、龍の長い全身像を制作した提灯を10数人の人たちが担ぎ上げ、練り歩く派手な祭り行事に出会った。横浜や長崎でも行われ南京町の3大春節祭りになっている。

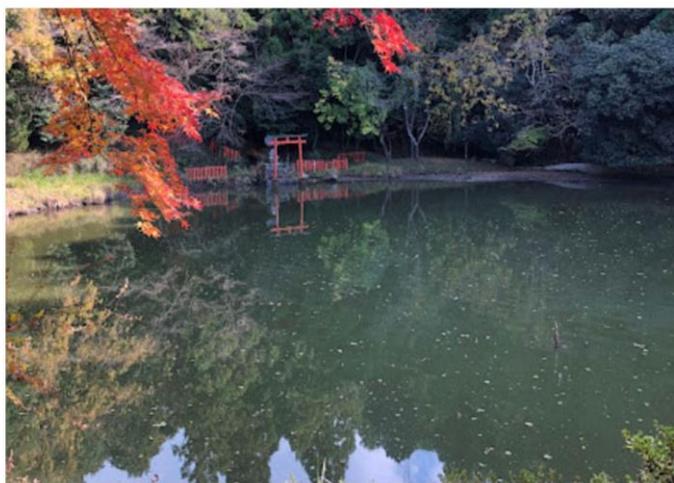
これは中国の伝統行事であるが、中国譲りの文化でなく、日本にも古くから龍が主役の祭事があって引き継がれてきている。奈良県桜井市に在る三輪神社(=大神神社・おおみわじんじゃ)は日本最古の神社で、三輪山がご神体で神山である。この神社は蛇が神使(しんし)で、拝殿の前に立っている大杉は「巳の神杉」と呼ばれている。神様の守護とお使役として存在し、蛇の好む鶏卵をお供えして参拝する人が多い。また三輪山麓に大きな龍神池があって、龍神が祀られている。蛇と龍、何となく長い体と鱗が似ているのは蛇が原型になっているようである。



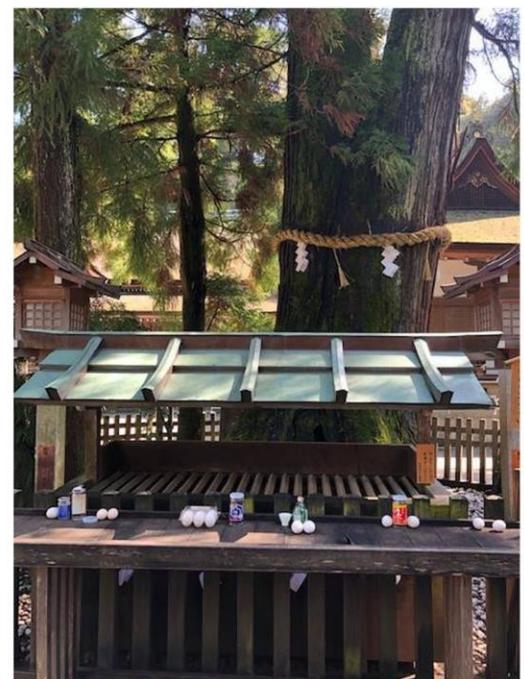
神戸南京町春節祭



三輪山と大神神社の大鳥居



三輪山麓 龍神池と神社



大神神社「巳の神木」鶏卵の供え物

高津の同期生で、親しくしていた熊田亮順さんが令和3年に他界した。彼は大学で仏教哲学を学び、永平寺で修行し高僧を目指していたが、若くして親を亡くし跡目を引き継いで住職となった。私は彼に誘われて京都の古刹を訪ね、仏教文化について教えられたことが多く、以来私が仏教美術に関心を懐く動機となったと思っている。彼と建仁寺や東福寺で観た、龍の襖絵や天井絵は墨彩画の素晴らし



建仁寺の襖絵



東福寺の天井画

いもので強く印象に残っている。彼との思い出を記した私の追悼文を、高津のホームページに掲載されているので、興味のある方は覗いてみて頂きたい。( [ShimizuKumada.pdf \(coocan.jp\)](#) )

日本民族ははるか昔から自然崇拝を重んじ、農耕民族として五穀豊穡を祈願し、自然の全てに神が宿っていると信じて来た。一神教でなく八百万の神の存在を認め、動物は神の使いと感じていた。6世紀に入ってインド、中国、韓国を経て日本に仏教文化が伝来したが、釈迦を教祖として扱ふことなく、教えを多くの弟子達によって広く伝えられ、如来、菩薩、明王、天という大枠の中で仏の役処を捉え、しかも万民は死して仏になるという思想に、日本古来の神道も死者の魂は山に住むという思いと共有するところがあった。一方学問としての仏教は知識人に受け入れられたと言えよう。そして神仏習合は日本の律令国家の歴史を構築するバックボーンになって行ったことは知るところである。

人は自然の脅威に対し立ち向かうことはできず、厄災を免れたいと願う事から守り神を身近な動物に求めたことは自然の成り行きだったろう。東の守り神



四神の守護動物

に青龍を、西に白虎、南に朱雀、北には玄武(亀)として四神の存在や十二干支などは仏教思想から受け入れられたが、自然の中の動物との共存は、神道と仏教との融合に日本民族はさほどの抵抗はなかったように思う。飛鳥時代の動物の石造、古墳時代の埴輪など、特に高松塚遺跡がそれを示している。

今回、龍の話を私なりに解釈してみると、架空の龍を設定することで、実物の動物にない超能力の持ち主としてイメージを膨らませることができる狙いがあったのではないかと推測してみた。神社に往くと拝殿の前に狛犬が鎮座している。これはライオンと犬の合体であろう。これも神社内の神域を強い守護力を期待して架空の動物にしたのではでないかと思う。また稲荷神社は農耕民族として稲の豊穰を願ってのことだと思うが、ここに狐が登場する理由は何か、赤鳥居に囲まれて拝殿前で睨みをきかせ、口に玉や、鍵をくわえたりしているが何故なんだという疑問が湧く。古事記や日本書紀に登場する八咫鳥(やたがらす)は、神武天皇の東征の水先案内をした3本足の鳥で、これも想像上の動物である。どんな発想で取り上げられたのかその訳を探ってみたい思いがある。私などは単純でその由来を聞くと納得してしまい易いタイプだが、意外に深い理由が在るのかもしれない。いつか機会があれば調べてみるのも面白い事だと思っている。

令和6年2月記



八尾神社の絵馬